

会報

おおいた

俳人協会大分県支部

秋の湯の町別府吟行俳句大会

大分県支部長 小松生長

発行所
俳人協会
大分県支部

発行人
俳人協会大分県支部
代表者
小松生長
事務局
大分市高崎3-13-14
神足方(かみあし律)
(題字:江田 居半)

郵便局振替口座番号
01740-3-24968
俳人協会 大分県支部

今年度の秋の吟行俳句大会は別府市で開催されました。当日の10月20日は台風19号の惨禍の報の続く中、我が国が開催国となったラグビーの熱狂の只中であり大会の会場となった豊泉荘のロビーもラガーシャツを着た外国人でいっぱいでした。大会では会員76人、一般の方65人の事前投句を、当日には66人ものご参加をいただき大変盛況のうちに終えることができました。この場を借りましてお礼申し上げます。

講師は発刊より87年1022号を閲した「駒草」四代目主宰の西山陸先生。台風の水害に襲われた川崎市より、またラグビーで賑わう大分県では宿泊の宿にご苦勞されながらも御出でいただけましたことを感謝しております。

先生の師は「ホトトギス」の女流俳句草創期の俳人阿部みどり女。なんと中津市にそのお墓があるそうですが、様々な事情で今回お参りは叶わなかったそうです。

講演は「名句の字余り、字足らず」。何よりもあの有名な虚子の『凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり』を皮切りに多くの字余り、字足らずの名句をご紹介いただきました。私達が日頃ただ「字余り、字足らず」はよくないものだと信じて信じてしまっていることが、良い俳句の創作の妨げになっているのではという問いかけ、さらに、自分の述べたいことを大切に、虚子のように自由に一つの技巧として使えることも大事ではないかなどの多くの示唆をいただきました。まさに目から鱗が落ちるようなお話でした。

また、去る10月6日には九州俳句大会が長崎で開催され大分県からも多くの投句をいただきました。入選者も多く当日には15名もの方々にご参加くださいました。ほんとうにありがとうございます。



講演中の西山陸先生

あつという間のこの一年。天皇のご即位の礼も終わり来年は令和二年。これからも役員一同結社をはじめ会員皆様方、広く大分の俳句界の力となれるよう励んでまいります。

少し早いですが健康にご留意されよいお年をお迎えください。

大会記

秋の湯の町別府 吟行俳句大会

10月20日(日)別府市の豊泉荘で秋の吟行俳句大会が行われた。昨年は国民文化祭と重なった為二年ぶりの開催だった。10時半受付の後、近くの別府公園などでの吟行を楽しんだ。

午後一時、副支部長阿部正調氏の開会宣言、支部長小松生長氏の挨拶と西山陸氏(俳人協会理事、「駒草」主宰)の講師紹介ののち、演題「名句の字余り字足らず」の講演へと、円滑に進んだ。先生は著名人の句を例に挙げて一つ一つを解り易く丁寧に御指導下さった。字が足りないからと切れ字を付けるのは一考を要するとの御指導があった。

今回の大会は、募集句1441名462句の応募があり、当日句は参加者66名に西山先生も出句され134句の互選句会となった。特選進特選入選は別記の通りである。

ラグビーW杯開催中の大分は宿はどこもいっぱいだった中、神奈川よりご来県頂いた西山先生ほんとうにお疲れ様でした。

(河野美千代)

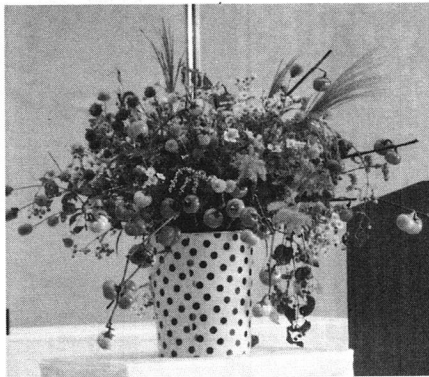
特選をいただきて(募集)

ひとところ金魚掬ひの灯の低き
睦ほたるこ



この度は「駒草」主宰西山陸先生の特選を頂き真にありがとうございました。この句の原

点は長浜神社の夏祭です。私の不器用のせいとか、ポイという道具の薄っぺらな紙のせいとか金魚一匹を一度も掬えずに今に到っております。突っ立って見るだけのあきらめと憧れの金魚掬ひの灯でしたが、次の夏にはもう一度掬ってみようと思ひ直している処です。



秋の湯の町別府吟行俳句大会成績(募集句)

特選

ひとところ金魚掬ひの灯の低き

大分市 睦ほたるこ

準特選

恐竜も羊歯も化石に星涼し

大分市 山下かず子

ひぐらしや大事に生きる時間割

大分市 高砂恵美子

由布岳のピクリともせず威銃

大分市 睦ほたるこ

入選

輪に入りて一夜の母と盆踊

臼杵市 益 美智子

月光を通して外すピアスかな

大分市 松本みゆき

容赦なき父の一手や夕涼み

大分市 堀田 稔子

爽やかに口笛吹いて不登校

大分市 宇戸美和子

片言のいふがままなる庭火花

別府市 古賀 宣道

新婚の表札小ぶり木槿咲く

大分市 岩波千代美

ひまはりが金婚の妻よろこばす

大分市 伊賀上由佳

背泳ぎや海の真中に裏返る

別府市 古賀 宣道

日雷ガリツと欠けし奥歯かな

大分市 後藤 南女

梨売りぬ小屋の片方木にくくり

大分市 秋篠 光広

西村 睦 選

秋の湯の町別府吟行俳句大会成績(当日句)

西村 睦 選

特選 ゆけむりの空の全開鳥渡る 大分市 光成 えみ

準特選 海晴れて八湯の神旅立てり 大分市 富川 元女

糸瓜棚湯治の窓を隔てたる 別府市 亀田多珂子

冬瓜のずしりと赤子なら男の子 大分市 睦ほたるこ

入選 目印はラグビーカラー鳥渡る 大分市 阿部 正調

湯治場に松の廊下や菊人形 大分市 宇戸美和子

湯けむりの風に踊りて一遍忌 別府市 安藤ミヤ子

素十句碑絃文の句碑小鳥来る 大分市 富尾 一恵

原子炉を匿す岬をかくす霧 大分市 睦ほたるこ

佳作 秋うらら千の湯煙海を向く 白杵市 芋岡 勝一

脳天に鵞の告白受けにけり 大分市 山下かず子

湯けむりの絡まる高さ神の留守 大分市 竹下百合子

秋日和温泉たまご並ぶ町 大分市 かみあし律

湯けむりやラガーをたたへ高々と 大分市 安部とみ子

後の月待つ湯けむりの皆素直 大分市 後藤千恵子

檸檬の字すつばし三十画越えて 大分市 古野 文江

足湯して異国の人と蒸し芋 別府市 森本 育子

秋草の一鉢をもておもてなし 大分市 押谷 隆

公園に入口三つ小鳥来る 大分市 中尾 豊子

秋篠顧問賞

ゆけむりや金木犀の多き街 大分市 野中 安子

小松支部長賞

風神の通り過ぎたる芋の秋 大分市 村山 眞砂

阿部副支部長賞

三軒のために駆ある花野かな 川崎市 西山 睦

亀田副支部長賞

公園の野外ステージ小鳥来る 別府市 糸永 悦子

市ヶ谷副支部長賞

宿下駄の音の百歩や紅葉の湯 大分市 古野 文江

互選賞

海晴れて八湯の神旅立てり 大分市 富川 元女

トライするカマキリの目のラガーマン 大分市 渡辺 節子

特選をいただいて(音鳥)

ゆけむりの空の全開鳥渡る 光成 えみ



西山睦先生、ありがとうございます。

「ゆけむり」の句での特選をいただき幸いです。ゆけむりと言えば先師絃文先生です。いづれかにおわすのではとゆけむりを見上げていました。

私の住む大分市の高台から見える由布山、鶴見山、国東半島、別府湾、そしてゆけむりも冷え込むようになると遠目に見ることができません。俳句が好きだけで詠んできた日々です。体調を壊している私を案じ、そして特選を喜んでくださった正調先生、句友の皆様感謝いたします。これからも精進をいたし、楽しみながらやれるところまでと思っております。

長崎九州大会に参加して

好天に恵まれた十月六日(日)

第十四回九州俳句大会長崎大会が開催されました。長崎駅にほど近い会場サンプリエールには、九州沖縄各県から参加者一六六名が集い、大分県からは募集句で入賞した方々と役員の計十五名が参加しました。JR・高速バス・車などで二名の宿泊の方を除き日帰りの旅でした。事前投句総数は二六五六句、大分からの投句は四三〇句で、開催県長崎に次いで多かったとのことでした。入賞者も多く出た結果となり、改めて皆様のご協力に感謝致します。

十一時からの受付は、募集句の入賞者の賞状賞品の受け渡しと、当日受付で大賑わいでした。特筆すべきは、当日句の席題が

「長崎囁目」となっていたこと。

あなたの目に触れた

あなたの耳に届いた

あなたの肌で感じた

「長崎」を詠んで下さい

ということでした。

当日句を事前に用意していた人もあり、突然の席題に、訪れ



次期開催県の挨拶をする小松支部長

たばかりの長崎を如何に詠めば良いのかと情景を思い出しつつ慌てて挑戦した有様でした。

午後一時から開会。開会挨拶、選者紹介の後、講演に移りました。講師は能村研三先生(俳句協会理事長・「沖」主宰)。演題「俳句は姿勢(福永耕二の思い出)」を熱く語られました。

休憩の後、募集句・当日句の発表、並びに表彰がありました。募集句に於いて、大分県は、大会賞・長崎県俳人会賞を筆頭に、佳作までの入賞者が延べ五十三人(複数の選者に入った延べ人数)に上り大健闘でした。

四時過ぎに閉会。その後の懇親会は百余名の参加でした。他県の方々と親睦を深め、三味の音に合わせた民謡「長崎ぶらぶら節」の情緒あるおもてなしも受けました。講師の能村研三先生と、再来年の大分開催のご協力もいただけるという約束も出来て、一緒に記念写真にも



能村研三先生を囲んで記念写真

入っていただきました。

「九州はひとつ」の言葉の下、二年毎に開催される本大会は、令和三年に大分で開催されます。日帰りの忙しい一日を過ごして長崎を後にしましたが、役員一同、沢山の課題を頂いた一日でした。

(かみあし律記)

第十四回九州俳句大会 in 長崎 成績

募集句

大会賞

蝶の昼赤子てのひらより眠り

大分 富川 元女

準大会賞

医大生のままの弟長崎忌

福岡 古賀 紀子

長崎県文芸協会賞

千羽鶴一羽も翔べぬ長崎忌

長崎 牧嶋貴美子

長崎県俳人会賞

同居するだけの孝行瓜を揉む

大分 横山八千代

長崎新聞社賞

星飛ぶや父母の戦後の長かりし

鹿児島 中間 恵子

西日本新聞社賞

塩壺にしほと母の字夜の秋

愛知 古賀勇理央

NBC長崎放送賞

鷹柱風の螺旋を競りのぼる

長崎 奥村 ちか

NCC長崎文化放送賞

どの坂も海より生まれ花朱欒

長崎 荒井千佐代



当日句

大会賞

長崎は海より明けてくんち来る

長崎 牛飼 瑞栄

準大会賞

蓮の実の飛んで爆心地の動悸

福岡 松隈 桂子

選者特選賞(池田謙児先生選)

この辺りむかし被爆田曼珠沙華

長崎 牛飼 瑞栄

選者特選賞(小浜史都女先生選)

天高し胸板厚き平和像

鹿児島 池田 貴之

選者特選賞(加藤いろは先生選)

あどけなき聖人の額秋日濃し

鹿児島 窪見 れい

選者特選賞(かみあし律先生選)

捨てきれぬ長崎弁や秋刀魚焼く

長崎 富岡三枝子

選者特選賞(岡崎照明先生選)

来崎のローマ法王小鳥来る

長崎 中島 久子

選者特選賞(大川畑光詳先生選)

殉教の白砂の浜や鳥渡る

大分 亀田多珂子

選者特選賞(西史紀先生選)

流星や「一香口」の中の闇

長崎 植木 千幸

大分県選者の募集句特選句

特選(秋篠光広先生選)

長崎 末田 洋

男湯の桶の響きや雪の宿

福岡 古賀 紀子

特選(阿部正調先生選)

医大生のままの弟長崎忌

愛知 古賀勇理央

特選(小松生長先生選)

塩壺にしほと母の字夜の秋

私の歩んだ道 その⑨



清家信博

S 14生 (椽)

五十歩百歩

三十数年前のある日、一番下の子が帰宅すると、「今日面白いことがあったよ」と話してくれた。子の小学六年生の頃だったと思う。先生が黒板に「五十歩百歩」と書いて、〇〇君これは、どういうことか話して下さいと問うたところ、「それは、お母さんが五十歩歩いた時、赤ちゃんは百歩歩くということですよ」と答えたそうだ。教室に笑い声が起こって楽しかったということでした。

この答えをした人は詩人の素質に恵まれた人かも知れないと思つた。ことわざや熟語を読んだり、考えたりする時にすぐ思い出すのは五十歩百歩のことでした。

今年の麦踏の季節と言つても、現在の麦踏は機械で済ましているかも知れない。それはよしとして、席題で「麦踏み」を詠むことにした。

海はるか見ては少年麦踏み

と詠んだ。子供の頃、島の麦畑に登って来ては、親に言われた畑の麦を踏んでいた光景だ。

その時、例の五十歩百歩の話が目に浮かんだ。そうだ、麦踏の句にこのことを詠み込もうと思つた。

子の百歩親の五十歩麦を踏み

と成つたので、年来の詩因だった五十歩百歩が解決したのをよろこんでいる。

日本には島が六千八百五十二あるそうで、そのうち無人島が四千四百二十四だそうで、有人島は四百二十八との統計がある。

麦と甘藷のふるさと大入島も、かつては四千人も住んでいたのに現在九百人しか住んでいない過疎の島となっている。

海部も山国の集落も猪や鹿ばかり増えて、廃屋や休耕地が増えてくる。

漁業も農業も生活しにくい社会

になってゆくのは、五十歩百歩なのかも知れない。

今宮嘉子

S 18生 (露の里)

季節を感じて

六十才を前に「仕事を辞めて時間が自由になったら何をしようか」と考えていた頃、近所の主婦友に「俳句はどう？」と誘われた。仕事をやりくりして月二回〈大分社会保険センター〉の俳句教室に席を置き(平成五年)俳句の始まりとなった。

「初心者歓迎」とのことだったが特に指導はなく二句投句の合評も難しかった。訳の分からないまま半年が経ち、「田所一滴先生のお宅で句会があるから行きましよう。お庭には山野草が色々あるよ」の主婦友の言葉につられてこのこついて行つた。(一滴先生は「露」誌の会員であり山野草の写真も趣味にしておられた)

句会は先年亡くなられた奥様の法要句会で三十名余りの集まりであった。なんと、その席に倉田紘文先生がお見えになったのだ。(先生は五十代半ばだったか)新

参の私は紘文先生のことあまり知らず、見たかった山野草は前夜の嵐で無残な有様で残念な思いを、

野紺菊一夜の雨に乱れけり

と投句した。ところが、この句が紘文先生の選に入りびっくり! その翌年、紘文先生の〈NHK教室〉が始まり私は迷わず受講生となった。

それでもまだ仕事の合間の受講で「露」の会員になったのはずっと後。月一回は添削五句、教室で三句、先生の楽しいお話に興じた時間は、ノートの記録も曖昧。平成十年、先生が『大分の文学碑めぐり』を出版されて大分県立図書館にて〈出前講座〉があった。いくつかの碑を訪ねる旅ではユーモアたっぷりの先生の説明も受けた。今に思えば宝のような時間だった。それから・・・先生は病氣治療へ。入退院されるのを一喜一憂しつつ・・・平成二十六年三月二十日が〈NHK教室〉最後の添削となった。

ゆるやかな流れに乗せて雑送る

(心やさしき一とき・・・)と先生の評。

遡って平成十年九月「落」に入会、平成十七年四月（落大分句会）幹事の手伝いをするに。当時はすべて吟行句会だったので毎月の吟行地、句会場の段取り、句会後の会報の発行と大変な中にもメンバー四人で楽しく動いた。そして私たちが奮い立たせたのは平成十九年三月「落九州俳句大会」が湯布院で開催されることとなり大分句会が運営をまかされた。参加者は二百五十人余となり盛況裡に終わった。落編集部知恵を借りながら、名簿の作成・印刷・投句箱等ほとんど手作りで準備して幹事四人のチームワークは確固と

なった。平成二十二年三月退任までの五年間に俳縁も広がり小さな句会にも誘ってもらった。一日二十句という多作の句会・酒宴の句会・袋返し・小旅行では電車の中・食事会は箸袋でと句会が付きまとう。苦行と言いつつもその魅力に取りつかれてしまった。その頃六十代だった私は若手ということで大分県俳句連盟の手伝いもするようになった。

平成二十六年十月阿部正調先生が「落の里」を立ち上げられ会員となる。同じころ山下かず子先生による（NHK教室）が再開され、いま気持ち新たに学んでいる。

日本の節気を意識しつつ自然の移ろいに季節を感じて暮らす日々はまさに《日々是好日》。これからも小さな気付きを大切に育んで五・七・五のリズムにのせられたらと思っている。

草の花おぼえて夫の庭手入れ

堀園子

S 12生（沖）
わたしの歩んだ道

この二・三日よく眠れない。朝三時頃、目が冴えて、輾転として障子の棧をほうと見ている。「わたしの歩んだ道」の原稿依頼を頂いている、神様に早く書けと言われているんだと、四時すぎ起き出してペンをとっている。

私は還暦を過ぎてからの俳句である。友人に誘われて句会に参加した。両子山麓の公民館の一室、畳の間の句会である。

ここ西武蔵はかの偉人三浦梅園先生の生誕の地であり、学問文化の匂いの漂う所である。梅園先生の生家は今も復元されて大きな茅葺の堂々とした家がある。その昔まだ復元されていない時の鄙びた茅葺の偉容があなたたかく郷愁が

あって私は好きだった。近くには三浦梅園先生の遺された直筆の書や、墨硯、顕微鏡、天球儀など多くの資料が展示された館があり、暫く三浦梅園先生の世界に浸される。

句会の指導は田辺博充先生で私より一回りお若く温厚な先生である。

入会してまもなく田辺先生の先生である能村登四郎先生の句碑が両子寺の境内に建てられることになった。以前「沖」の全国大会が別府で開催された時、先生の詠われた

国東や枯れていづくも仏みち

登四郎先生の直筆の句碑である。平成十二年二月、その日は朝からちらちらと降り出した雪が両子山をすっぽり包み、俗世を抜い清めて雪景色になった。天蓋のようにしぐれ紅葉の大樹が雪を被って美しい。

車から車椅子に移られて登四郎先生が句碑近く来られて、雪舞う中の開眼除幕式となった。大勢の参加者の中、大分からいらした瀬戸石葉さんの吟詠が朗々と両子山に響いて厳肅な雰囲気の中に句碑は堂々と現われた。登四郎先生の

あたたかな人柄がその筆跡に滲み出ていて、今でも句碑を仰ぐたび、先生よりお力を頂いている。句碑に会いたくて時々、両子寺を訪ねる。

両子寺は千三百年の歴史を持つ。国東半島の中心にあり、六方に広がる峯の中心にある。参道の無明橋を渡ると大きな仁王像がある。体の不調の所を撫でると良くなる聞き、自分の膝、仁王様の膝と撫でた。仁王様の膝は石にもかわらず磨かれて光っている。

田辺先生は昨年句集「放課後」を上梓なさった。表紙の帯には

かかる夜は木葉木菟守る国東塔

と能村研三先生が選んだ（序）よりの一句が記されている。私も田辺先生のお句を三句選ばせて頂きました。

くにさきや銀河しづかに氾濫す
瑠璃光寺さるすべり未だ簪ほど
芋名月妻の湯浴みの音すなり

先生と言われる方はいつも私より先輩の筈なのに、こと句作にとつては先生は私よりずっとお若い。なので先々まで安心してご指導を頂けることを有難く思っています。

師の句碑へ風幾曲り花芒
 袈裟懸けに注連新しき仁王像
 師の句碑や両手あふるる岩清水
 園子

堀田毬子

S 30生(落の里)
 鬪病と俳句

「落の里」の創刊句会が行われていた頃、私は不安の真つただ中にいた。それからしばらくして臍臓がんの告知を受けるのだが、俳句を始めて五年が過ぎた頃であった。入院していた私は自分でも驚く事にその告知を受けた直後、二日後に控えていた「落の里」の例会に参加するべく一時退院を申し出たのだった。例会では淡々と一日を過ごす事ができた。絶対にまたこの俳句の場に戻って来よう。その時の静かだが揺らぐ事のない思いはそれからの鬪病の力となっていた。

晩秋といふ深淵の端緒にあ
 吾亦紅隣りの花が遠すぎる

その後幸いにも手術・抗がん剤治療が順調に進んでいった。とはいえ散歩もままならぬ状態。気分

の良い時は外の空気を吸うように心掛けた。俳句の種の一つでも拾えたらという思いもあった。また「投句だけは続けよう」と、以前の俳句手帳を捲っては手直しして投句を続けていた。

全てを包む春風の中にある
 踏みしめて下萌ゆる地に応へけり

抗がん剤治療が終わった頃、俳人協会九州大会での準大会賞という吉報が舞い込んだ。主治医のOKを頂き不安な体力ではあったが、夫のサポートで鹿児島に向かった。体調を見ながらのゆつくりな旅である。そして、この旅がその後の私の行動を大きく左右する。がん罹患したら何もできないという先入観があったが、自信をつけた私は、今まで行きそびれていた場所に行こう、会いたい人に会おう、そう強く考えるようになった。

まず、気掛かりだった関西時代の友人の病気見舞いに奈良へ出掛けた。娘さんに付き添われながらホテルまで会いに来てくれた彼女と互いに励まし合った。その旅では平城宮跡を散策し、京都へも足を伸ばした。しかし残念な事にその二か月後彼女は亡くなった。

天平の風待つ玉座秋日和
 秋ひばり朱雀大路の空悲し
 それからも旅を続けた。俳句を土産として。

潮の香の美ら海自在初つばめ
 秋霖の備前の里の登り窯

そして有難い事に体力が回復してきた頃より幾度も吟行に誘って頂いた。五感をフル回転させる吟行に気が高揚し、再び皆と同じ時を過ごせる喜びで一杯であった。中でも初桜から満開、花吹雪へと桜を追っての三度の吟行が忘れられない。私にとってはこの時の桜は格別であった。

初桜一年といふ重み抱く
 み空まで花びら返す風の思惟

振り返ると鬪病のこの五年間の欲の深さに驚かされるが、この「欲深さ」が延命に通じたのかも知れない。また集中力は祈りと同じだと聞いた事がある。集中力が必要な俳句作りは私にとって「祈り」だったに違いない。

冬木の芽はほつ生きてゆくつもり

◆編集後記◆

▼九月、ラグビーW杯が開幕し、日本代表チームの活躍で国中が沸きました。大分では準々決勝十月十九、二十日まで、開幕からの五試合が行われたため、応援観戦に来た海外や日本の観光客が街にあふれて大賑わい。これまで慣れ親しんだ日常と違う景を感じることができました。

十月、天皇陛下即位式がテレビで生中継され、世界中から感動したという反応があり、改めて自国の歴史や在り様を見直す機会になりました。いいニュースが次々とあり、つい足元のことを忘れてしまいうような秋でした。

▼俳人協会は、支部や九州の行事が終りました。今年もあと一か月となりました。皆様どうぞよいお年をお迎え下さい。(律)

—お詫びと訂正—

第39号P3「第28回俳句大会当日句成績」の準特選者の名前が間違っていました。

大分市 堀内勉↓坪内勉さんにお詫びして訂正致します。

俳人協会大分県支部

会報「おおいた」第四十号

令和元年十二月一日発行

発行人 俳人協会大分県支部

編集人 小松 生長

かみあし律

事務局 〒八七〇〇〇八七二

大分市高崎三二一三一四

かみあし律

印刷所 ☎〇九七―五四六―二九三四

(株)大分出版印刷